太棹

第百十五號

東京 太棹社 發行

閑静

スウハ・アウルシ

高級

蒲田區御園町二ノ一四
電話蒲田三六二一番

松幸

すき焼
和洋御料理
淺草公園（千束二ノ三四）
牛鍋本店
電話根岸(87)〔〇三八〇番 二〇〇〇番〕

風流・金ぷら・茶漬
【美地句】
大はま
新橋二ノ八
電銀二〇八

光榮の南北座

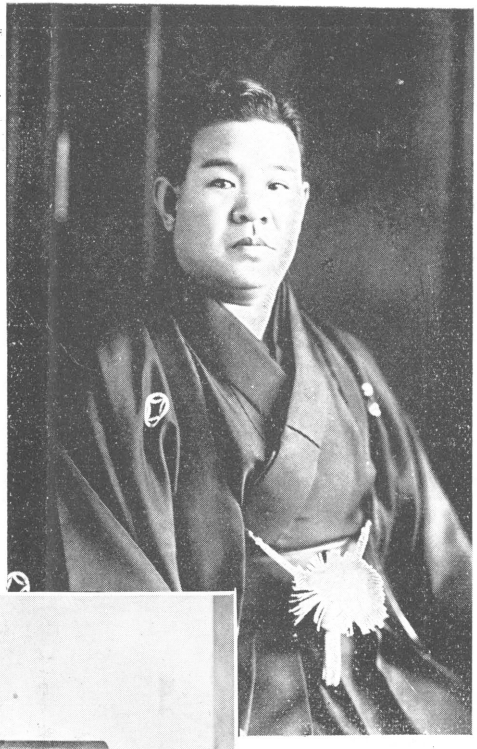
閑院宮華子女王殿下の台覽を賜ふ

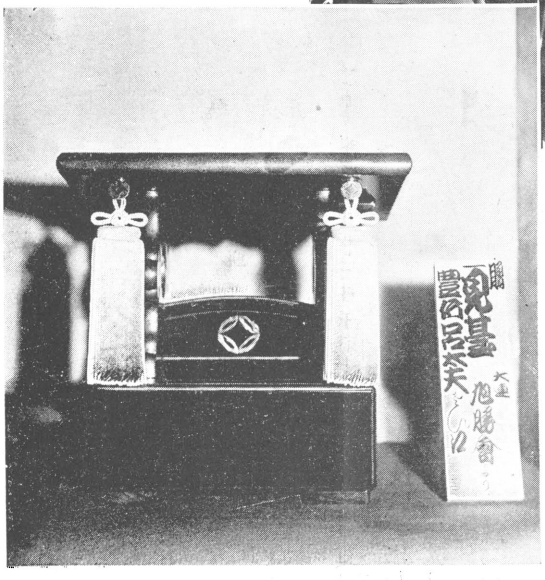
皇紀二千六百年を奉祝し六月三日より三日間日本橋倶樂部に於て記念公演を催ほした東京人形淨瑠璃芝居の南北座は三日目に閑院宮華子女王殿下の台覽を賜り無上の光榮を浴した。

この光榮は獨り南北座のみならず、日本全淨曲道が他藝に誇るべき一大慶事である。

寫眞は台覽の「日本振袖始鏃川の段」の素盞嗚尊の人形にて、頭は江戸時代の作者泉屋五郎兵衛の名作である。

旭勝會より
豊竹呂太夫氏へ
贈られた見台





豊竹呂太夫師と大連竹本旭勝氏とは三ケ年來の知友であるが今回旭勝連の旭勝會から同師へ見台が贈られた。寫眞は豊竹呂太夫師とその見台。

拜啓　時下春暖之候に御座候處貴社益々御隆盛之段奉賀上候
陳ば突然にて誠に失禮之至りに候へども貴社發行の雜誌は當兜會々員一同に於て以後購讀せざる事に決議仕候間一同へ對する御發送方御中止被下度尙廣告の掲載も同時に御中止被下度御願ひ申上候
右の次第にて從來の關係を此際一切御斷り申上候間不惡御諒承願上候追て本會員に對する購讀料等は卽刻御請求被下度右御通知あり次第直に御支拂申上候先は右御通知迄　早々拜具

五　月

兜會
幹事長

淨瑠璃雜誌社御中

謹啓　陳者先般來大阪天狗雜誌々上に於ける本會員に對する評論に端を發し淨曲界に大波亂を捲き起したる件に就き全國同好の士より深甚なる御同情御後援を辱ふし本會員一同感銘措く能はざる處に有之難有奉深謝候
就ては本會は別揭の如く協議一決仕り候條右御諒承被下度なほ本會は斯界發展の爲め一層奮勵可致存念に御座候につき今後とも何卒御後援を賜り度此段御禮旁々御挨拶申述べ候　　草々

二伸　なほ六月廿三日午前十時半より日本橋倶樂部に於て本會創立十週年記念大會を開催仕候間當日は何卒賑々しく御來遊御聲援の程を偏に御願申上候

兜會

諸賢

帝都素義名鑑の延刊に就て

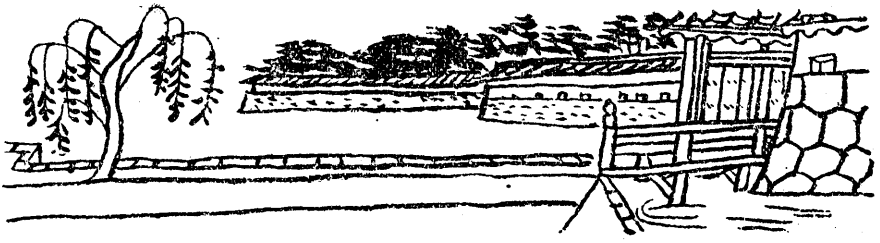
弊社が『帝都素義名鑑』の發行を企てました處、御賛同を賜り多數の御申込みを得ました事は誠に難有御禮申上ます。

ところで、此の發行の遲れましたことは、早く御申込みの方々には何んとも恐縮に堪えません。弊社も又これ程に延刊するとは思はなかつたのですが、取りかゝつて見ると中々むづかしく、それに折角企てました事でもあり、今後の發刊は十年二十年後淨曲界の一變した上でなくては出來ませんので、此際お一人も多く洩らさじといふ念願から、〆切も附さずに皆様に勸誘申上げてゐました處、後から〳〵と續々の御賛助御申込みに接しますので、遂に慾も手傳つて延刊といふ有様、昨年から御申込みを賜り未だ御寫眞の拜借出來ぬ方々も澤山ありますが、外の事とは違ひ强請する事もなりませんので、何卒お早く御撮影下され御貸與の程を願上げます。

なほ此際何卒御誘ひ合はされ弊社の此の記念事業の御援助を賜り度偏に御願ひ申上ます。

紙もだん〳〵高値を示し定價も計畫當時のものでは困難を生じますので、いづれ今後は〆切を附して發行を急ぎ度く存じますが、〆切後の御申込みは一冊十五圓或は十七圓の定價となる事も止むを得ないと存じます。

（太　棹　社）



太棹　第百十五號目次

明治時代近松研究の先驅者……中野三允…(四)
東京と大阪方……紅雨莊主人…(七)
文樂樂屋圖繪……宮尾しげを…(一〇)
義太夫の辨證法的發展……川口子太郎…(一二)
ラヂオ淨曲漫評……金王丸…(一五)
素義人描影……內田富太郎…(一九)
淨界消息……(二〇)
太棹社報彙……(二三)
當座帖……
編輯後記……芳河士記……
寫眞……光榮の南北座・旭勝會より豐竹呂太夫師に贈られた見台
表紙・カット……宮尾しげを……

明治時代近松研究の先驅者

中野三允

義太夫研究に關する史的懷古は非常に必要なことだが資料蒐集の點に缺けるやの嫌なしとしない。今私が左に水谷不倒の一文を紹介するのも大に感ずるところがあるからだが、「近松が作の人物を性情より論じたるは恐らく仁王生以前に其の人なかるべし」とあるなど、兎に角大に參考となすに足るところの重要なる文獻である。

扨て本文は明治二十八年三月十一日發兌「精神」第五十三號所載である。

近松門左衛門の評者

不倒生

戲曲作者近松門左衛門の名嘖々、今の文壇彼れにつき何かいはざれは、美文界中の野暮と目せらるゝやの趣あり、吾れも人もと近松を論ず。曰く近松門左衛門、曰く其の門左衛門を讀む、曰くまた其れを讀む。分析といひ、批評といふまことに盛なりといふべし。予は此の「近松門左衛門の評者」なる題の下に、是等最近の評者をいはず、かゝる流行を來しゝ以前、更に早く近松が作に、批評を試みたる一人あるを世に公にせんとす。

近松は存生中より今に至るまで多くの知己をもてり。貴顯には　靈元上皇、これ近松が生前の知己なりき。上皇は頗る下情に通じさせ給ふのみならず、文學にも心を潛められ、歌詠はもとより、俳諧さては發句の御嗜さへあり、當時近松の作『お夏清十郎五十年忌歌念佛』の評判高かりしを聞召され、

清十郎聞け夏が來て啼く時鳥

と吟じ給ひぬ。また　上皇は同人の作『最明寺殿百人上臈』を御覽ありて、或時御歌合の席にて仰せらるゝには、卿等近松の作を見しやと、みな〳〵未だ見ざる由を申上ぐれば、上皇は重ねて、鉢の木段道行の文句に蝶の翼のおしろひを草にとぼして梢には鶴の霜毛を脫きかくる雪は花より花多きとあるは、彼の石曼卿が詩に

蝶遺粉翼輕難拾、鶴墜霜毛散未轉

とあるを飜譯したるものなるべし、かゝる文才ありて和歌を

詠じなばさぞ興味深かるべきにと賞し給へりとぞ。また學者には荻生徂來あり。徂來は『會根崎心中』の道行、

此世のなごり夜もなごり、死に行く身を譬ふれば、あだしが原の道の霜、一足づゝに消えて行く、夢の夢こそ哀なれ。あれ數ふれば曉の、七つの時が六つなりて、殘一つが今生の鐘のひびきのきゝおさめ、寂滅爲樂とひゞく也。

とあるを見、近松が妙處此の中にありといへり、蓋し死を急ぐ德兵衞おはつの身邊へ、未來といふ想像が一歩〳〵迫り來れる形容の妙なるを激賞したるにあり。

此の外『難波みやげ』の著者もまた近松が知己なれども、要するに前者は字句の上の批評、後者は觀劇家の小言脚色の評判に止まり、予が紹介せんとする評者の着眼とは珊か異なれり。最も新しき批評法の先鞭を着けて、近松が作の人物を性情より論じたるは、恐らく仁王生以前に前人なかるべし。

仁王生の實名はしばらくいはず、されど生がいかにして近松最先の評者なるかの手續きを明さんに、今より五年以前明治廿三年の夏の頃、同好のもの五六人大久保に會し、文學を研究す、號けて彌遠永會といふ。文學を研究する方法は、毎月一回所思を文に綴り、集めて一冊の雜誌を編し、これを『延葛集』と號け、互に論評しき。予は此の會へ加はりし最後の一人なりしが、當時此の會にて研究したる主題は、實に近松門左衞門なりけり。同年の冬に至り、會員は遂に近松が作の人物論に着手しぬ。

仁王生は社中の先輩にして、殊に我邦の戲曲、小說にも疎からされば、十月編輯の『延葛集』に『夢の夢』と題する一編を掲げたりしがこれぞ近松作の人物性情を論じたる嚆矢にして、縱令其の批評眼は幼稚なりしにせよ、他のひとゞ〳〵は既に筆を着けんとして、一歩彼れに輸したりき。

今幸ひ『延葛集』の反故予の手元に預れば、これを公にして今日世間に著はるゝ近松の作評に比し、如何の逕庭あるかを吟味するも、文學趨勢の一班を窺ふに足るべし。

夢のゆめ　仁王生

近松の院本に付て從來種々の評者あれど、大抵は時代物を揚げて世話物を抑ゆ、其理由を聽くに、時代物は古今の歷史に據りて趣向したるものなれば大に感嘆すべけれど、世話物は其事其文兩ながら野鄙猥褻にして見るに堪へずとなり、されど吾等の見る所に依れば、時代物はこじつけの作かさなくば、繩墨に拘はりて快活の精神に乏しきものゝみ、世話物はいづれも人物さながら生きたるが如く、且つ其文字絕妙にして趣向も亦巧なるもの尠からずと思はるぞかし、又當時の社會に關係せる度合よりいふも、彼は少なく此は多く、彼は當時は箇樣の院本を嗜みしかといふことを知るの外、格別の材料とも成るまじ此は併せて風俗習慣元氣等をさへ認るに足るあり、されば近松が希世の大才を顯はしたるはまことに此に在りて彼に在らざるに似たり、こ

れ吾等が先づ世話物に就て其人物を研究せばやと思ふ第一の理由にこそあれ。

しかはあれど吾等の見る所誤りたるやもしれず、そは未だ深く近松及び其院本を知らざればなり、さもあらばあれ爰には又別に一言すべきことあり、凡そ人間を研究する法は、第一は其言を聽くにあり、第二は其行を觀るにあり、第三は其心を察するにありとは誰れも知ることにして、第一第二は二六時中生きたる人間に接して研究すべき機會を持ち居れば大抵の人は實行してあるべけれど只第三に至りては特に其境遇を調べ、其時勢を明にして云々するに至りては、性來無器用なる吾等は、其人物に虛心平氣の觀察を下して、正鵠を得ることの頗る難きを感ずるものなり、さるからには活物に付て研究することは暫く見合せ、聊か紙上の人物を研究する所あるべし、併しながら此くても中々六ケ敷きわざにして差當り公平の觀察は覺束なし、覺束なしと雖どもこれだに爲さゞれば、到底生きたる人間を察する所謂心眼といふものを養ふべき機なかるべきなり。

右は「夢のゆめ」の緒言にして、仁王生が第一に評したる近松の作は次の如し

戀八卦柱暦のおさんと茂兵衛

おさんと茂兵衛の不義は實に間違ひより起りしものにして、所謂戀せぬ中の戀にはあれど、互につれつ連れられつして走りしかば、浮名忽ち世間にひろまりしのみかは、此間違ひを知れるお玉といふ下女さへも、まをとこでないと云ふいひわけすべきよしなかりき。されば急に公の沙汰となりはりつけに掛るべき科ある身とは定まりぬ。さる程におさん茂兵衛はこゝかしこさまよひしが、今はとてもと思ひしにや、おさんは、父母の頻に戀しく成り、一度なりとお顏拜して後ち兎にも角にもなりたしと云ふ、よりて兩人親里へ忍び行く、然るに折ふし道にて兩親にあひつ、さて父母の歎きがいとしければ、一日にてもながらへるが孝行なりとて、これよりかくれ家に忍び居る、さるを訴人ありて兩人とも召捕はれたり。

おさん何ものぞ、其母おさんの許に來りし時、おさんが「かゝ様よふどざんしたとつ様はなぜおそい」との問に答へていふ、「さればいのとつ様は一昨日花の本の連歌の會に夜をふかし。少し風氣の有がうへに風早宰相様の朝茶の湯、彌々風を引添へそれでえどざらぬ、先づ〳〵けふは毎年かはらぬ初暦商賣繁昌めでたい〳〵、以春殿（おさんの夫）はどこぞ、悅びであらふの」と、父其父おさんが亡命中、道にて涙ながら叱りていふ、「道順が未來も知れた、ひとり娘のことなれば聟を取て家を繼がする筈なれど、近年諸國の銀もすまず、家屋敷をも人手に預けるひつそくの身、此跡を娘に渡し苦勞さする可愛さに一代切に家を捨て嫁入させた親心、さきとても其合點、道順が娘ならば拵いらぬ土產もいらぬ、そだてた親に見込が有、娘の心が土產じやと慕はれた根性に畜生の魂がいつのまに入かはつたか」と、蓋しおさんの生家は相當の生活を爲したることあるべく、又おさんは女の學ぶべき藝は一通り習ひ浮べ、其上女大學の一冊位は（當時ありたらば）讀みたることもあるべし、然らば其素性は決して卑しきものにあらざるべし。

東・京・と・大・阪

紅雨莊主人

◇東京と大阪と、藝の巧拙を比べる事になると、玄義は全然問題にならず、女義は東京も仲々勉强するが、これも姉さんと妹位の違ひはあり、素義も東京に上手も多いが、おしなべて矢張り大阪にずば抜けたのが澤山ある。本場と云ふだけあつて、大體に於てこの傾向は爭はれぬやうである。

◇巧拙といふ事については右の如しとして、兩者の間に藝の質と云ふか、風と云ふか、とにかく行き方に違ひがある事も目に付く事實であつて、そして其違ひも、要するに「土」だと云ふ事に歸するやうである。

◇大體に於て、東京は藝を眞面目に取扱ひ、これと四つに組んで苦吟する風があるのに對し、大阪は藝を樂みと考へ、引携げて振り廻さうとする。東京の人は淨瑠璃と組合つてゐるから、淨瑠璃の足は多くは地を離れず、どうかすると語り手が引携げられて居る。大阪の人は淨瑠璃を引携げやうとするから、旨い人の中には往々にして無暗に振り廻して淨瑠璃が目を白黑して居るのがあり、旨くない人は淨瑠璃と一所に引くり返つて泥まみれになつたりする。上手下手を問はず、東京の語り手は六かしい顏をして居り、大阪の語り手は面白さうに樂んで居る。

◇苦吟するから、東京の淨瑠璃は聞いて餘り面白くない。其代り品がよい。また兎角理詰めになるから、誰れのも大低似たやうな味である。之に反し大阪の方は聞いて面白いが、どうかすると品が惡くなる。そして人によつて皆語り方が違ひ同じやうなのがない。これは大阪に師匠が各派に亘つて澤山あるといふ事實にもよらうが、一つは四つに組んだ格好は誰れのも大體同じものだが、宙に浮かして振り散らかす日になると、形は人により千差萬別といふ事になる。

◇東京が大阪に學ぶべき事の一つは、「引携げて語る」といふ事であらう。引携げれば淨瑠璃は活氣付いて來、表現も自由にやれる姿勢になる。引携げるのには聲を作つたり、喉で攻めたり、要するに聲ばかり氣にしてゐるやうでは駄目であること、譬へば二の腕を胴體に縛りつけて前腕だけの働きでは思ふやうに働けぬのと同じであらうと思ふ。持前の腕を自然に出し、引携げて語ると云ふ事が淨瑠璃の本道であるやに筆者には思はれる。若し間違つてゐるなら斯道の大家の叱正を願ふ。

◇此前報知講堂で東西の競演會があり、大盛會であつた事周知の如くであるが、其時東京側の某氏（當時中堅大家）の語

るのを大阪方の語り手が二人見物席で聞いてゐたが、感に堪えた様子で「よう語つてんにやがなア」と評したのを耳に挿んだ。この「にやがなア」が問題なので、或意味に於て、東京の淨瑠璃の全貌を盡して居る。其淨瑠璃は、一語一句十分考へ研究して語られて居るが、其一語一句の間の息と氣合がぬけており、全體として平坦で、どこと云つて悪い所が無いのに、一向面白くなく、之を物に譬へれば、お手本を見い〳〵、寸分違はず似せて旨く書き上げたお清書とも云ふべき演出であつた。即ち大阪子が「にやがなア」と嗟嘆した所以である。

◇淨瑠璃が東京で流行するのも已に年久しく、しかも近年の流行は目覺ましいものであるにも拘はらず、右に述べたやうな特光があり、われ〳〵の普通淨瑠璃と考へる代物と何となく少し違つた形をして居るのは根本的には「土」がさうさせるのであつて、文樂でさへ東京人の古靱太夫は兎角理に落ち易く、同じく東京人の相生の如きもいつ迄も野暮で固い所が見える。

◇東京人である谷崎潤一郎は、東京の事を東北の入口だと云つた。實は筆者も東京は北國の部に屬すると感じてゐたので同氏との觀察の暗合に驚ろいた次第である。東京の人は大體に於て眞面目で、實直で、むつつり屋である。武家の街であつた關係も幾分か有らうが、これは主として氣候と光線の所爲で、昔は女の身なりでも澁くくすんで、化粧も薄く、東京の人は色が黑いと地方で云はれた。女でもなるたけ賢こさうな顏や深刻さうな顏をして居り、大阪あたりのやうに、面白さうな、愛相よさゝうな顏はして居らぬ。要するに北國氣分である。

◇北國の人は聲がよくて歌が旨い。それは氣候の關係で口をつむるに傾くから咽喉が保護されるのかも知れぬ。そして幾らか瞑想的であり、浪漫的であるから歌ふのに巧みである。其代り口を開かぬからズウ〳〵になる。出雲の殿樣は北國から移封されたのだが、中國だのに、今でも土地の人はズウ〳〵で、歌がうまい。東京へ西の方から來ると人の聲のよいのが耳につく、それは少し固くやゝ金屬性だが、美しいよい聲である。そして歌が旨い。實に東京人は歌ふのが好きである。大椽、朝太夫、呂昇、皆東京で珍重された。之に反し大隅、長廣(旭孃)のやうなのは向かなんだやうである。東京は淨瑠璃をさへ歌ふものにしたり、唸るものにしたりして了ふ。

◇之に比べると大阪は寧ろ南國氣分である。人の氣風も賑かで輕く、屁理窟を厭らひ、實利的で現金な所が有る。愛想のよいのが原則で、變り者は寧ろ飄逸離脫の型を取る。年中口を開けるに傾くから、聲が悪く、女迄が一と歳取ると抑へ付けるやうなへばり聲を出す。聲が悪い爲めに歌は上手でないが、其代り色々の感情の表現に便利である。ことに、これは全く筆者獨自の私見であるが、東京の言葉よりもアクセントの變化が多く、聲の高低の幅も、東京のより一二調子上と下

とがある。この事は一層言葉の表現力を助ける。大阪に淨瑠璃や浪花節の發達するのには理由があるやうに思ふ。

◇東京の人があまり十分に口を開けず、開けても大阪のやうに左右に開けずに上下に開ける結果は甚だ屢々アカサタナハマヤラワがオコソトノホモヨロヲに近づく。五十音のうち十音の影が薄くなると事實は四十音になり、云はゞ二割減になる。聞いて單調たらざるを得ないので、開合の大切な理由は聞いて分る分らぬ、愉快不愉快の外に、單調になるのを避けるといふ點があると思ふ。先日並木へ聞きに行つたら口上言ひが勢込んで千鶴氏の事を大きな聲でチコークとはつきり發音した。氣取る程口を上下に開き、大阪のやうに左右に開かぬのである。數年前に神戸在住の親戚の老女が來たので東京で相當の顏と思はれる素義を聞かしたが、其評に、皆さんよう語りやはるが、訛りが有るのと、それにオー〳〵云やはるのが耳につくと云つた。開合の事である。其後東京でも研究が盛んになつて大分趣をかへたが、東京の淨瑠璃を特色付けるものゝ一つはこの開合と訛りの問題、卽ち發音とアクセントとが幾らか單調に傾く傾向があるといふ點である。「土」と云ふ所以である。

◇從て、大阪から學ぶ第二の點は口さばきと開合をよくするといふ事である。そしてそれをするには口を左右に開かねばならぬ。上下に開くのでは、開けば開く程オー〳〵になり、開合も口捌きも台無しになる。開合は一字々々の發音の明瞭なこと、口捌きは字から字への移り替りの鮮やかなことである事云ふ迄もない。無論大阪にも恐ろしく開合が惡く、又はマクレテ譯の分らぬのが無いでもないが、とにかく大體に於て右に云つたやうな事が云へると思ふ。訛の問題は今は預かる。

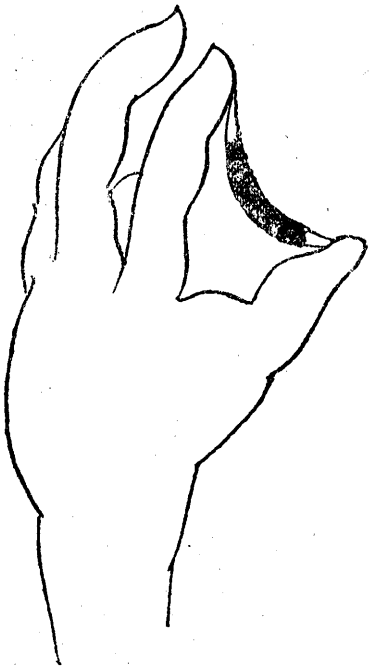
◇所で、將來はどうかである。大阪がいつ迄も東京の先生であるであらうか。文樂が大阪に根城を構へて動かぬ間は、大阪は依然として「本場」であり、よい稽古も出來、傳統の空氣もあつて素人にも上手が絕えぬであらう。然かし筆者は何となく文樂といふ大木の壽命が來かゝつて居るのではないかと感じる。これが東京に移植せられ、織太夫、伊達太夫、重造、團六、紋十郎等の若芽が更生の勢で伸び上れば、形勢は一變しやう。文樂の東潮を豫言するのでは無い。其土地の人が保護しなくなれば枯れるから移植の外無く、移るとすれば東京の外にない、といふ譯である。已に、素人でも、特一級の人達は別とし、ちよい〳〵廢頽氣分も見えぬでもない。

◇それはそれとして、將來淨瑠璃が東京に移つたらどうなるであらうか。恐らく今の東京風が益々助長せられるであらう。これは「土」だからどうにもならぬのである。其結果は淨瑠璃は面白いよりも益々深遠にして幽玄なる「藝術」となり、平淡にして充實せるものになり、中々分らぬものになり其結果精々二三十分、それ以上は聽手の興味體力の續かぬものになり、今迄のものでは筋が分らぬから拔くか抄錄的に書き直すかする事になり、發音は東京訛りになり、段々常盤津や新內に近い味のものになり、そして結局常盤津や新內のやうな運命をたどるものとなる、とゝゝ迄空想を逞うしたら恐ろしくなつたから、も一度考へ直すが、この空想の始めの部分は已にチラホラ實現しつゝあるやうである。已に古靱太夫でさへ、地方へ行つて素語りすると、どうかすると一段持ち切れず、見物が立つとか聞いた。

◇それ迄は、開合正しく、口捌きよく、持前の自然の聲で、引携げて語る、といふあたりを大體の方針とし、他山の石を以て自己の玉を磨くといふ事になるであらう。（一五、五、二）

文樂屋圖繪

——宮尾しげを——



「二十四孝」で山本勘助の人形が、片目をつぶして赤目になるのは、この繪の樣な仕掛があります。横一寸八分五厘程のクヂラのひげへ赤い綿をまきつけましたものを用意してをいて、いざ目をつぶした時に、これを人形の目のところへ挿込むのです。クヂラは自由にしないますので樂に入ります。舞台の急がしい場合、人形の頭を變る程でもないのでこうした仕掛が生れたのです。

義太夫解說（其二）

序文として——

義太夫の辨證法的發展

川口子太郎

僕は義太夫に對して、好きな作と嫌な作との區別が甚しい。其作に惚れ込んだものでなければ稽古もしないし、勿論語る氣にはなれない事は、恰も惚れてない女のところへ百夜通ひの眞實はつくせないが如くである。私が惚れ込んだ作品であり、從つて身を入れて稽古もし、高座へ出して語るものと云ふと、先づ第一に「木下蔭狹間合戰」の壬生村である。——これは露西亞文學のやうに陰慘であり、暗鬱迷信の江戸時代の暗さと、頽廢的な人情噺の雰圍氣があつて、若い人にとつても、築地小劇場で「夜の宿」を見るやうな感じがわかる筈だ——次に「苅萱桑門筑紫轢」の守宮酒である、——守宮を入れた酒で處女の貞操を亂すといふ趣向がどうのこうのと云はれたりするけれ共、そんな末梢的な事よりも、もつと根本的な思想は、その夕ひでと云ふ娘が身を汚した言譯に自害して「たとへ守宮のわざならずと、ちよつと見るから思ひそめ心が先きへ穢たもの」と告白してゐるのでわかる、人間の本能を强く描いた新しさがある。——他に「義經千本櫻」の大物浦渡海屋、もう一つ、語つてゐて、ほんとうに泣けてくるのは、近松の「平家女護島」鬼界ケ島蜑名殘である。これは殆んど廢曲同然なのを、如何にも作が優秀だし、曲も古風でいゝので、一昨年の若手會で封切發表したのだが、俄然此時評判になつて、云はゞ素義としての私の出世藝となつたものである。此稽古本が無くて、大阪迄探して版木を拾ひ出して貰ひ、それも三頁ばかり版木がこわれてゐたので、そこだけ墨で書いて補つて貰つたりして、相當に骨を折つて漸く發表したところが、安藤都昇君が大いに感激してくれたし、大山一徑君が興奮してくれたし、內田富太郎君が「良い新劇を見

た感じ」と云つてくれたし、前の方で眠つてゐたやうな一婆さんが、千鳥の「女子一人乘せたとて輕い舟が重らうか」といふ詞のところで、突然「可愛さうにねえ」と大聲をあげた時には、近松の名文の力を痛感して、此古曲が現代でも立派に活き得るといふ自信を得て、私のさゝやかな努力が決して無駄でなかつたといふ喜びで、胸が一杯になつた——私にとつては記念すべき語り物なのである。私の最も惚れてゐる語りものは今では先づ此四段である。然し、私はまだ若僧であり青くさい、なつてない義太夫なのだから、「壬生村」だの「鬼界ケ島」を語る力が無い事は充分承知してゐるのだが、私が語る以外他に誰もやつてくれないから、僭越を承知でやつてるのである。私は、私が語る事に依つて、昭和十五年の今日「平家女護島」といふやうな題字が印刷され、ビラに書かれてゐる、——辛うじて、今でも活きてゐるといふ事、それだけで滿足なのである。だから自分が語らなくても、もつと先輩のうまい人が優秀な作品をとり上げて、やつてくれれば尙更滿足なのである。松尾武市氏が「國性爺」の紅流しを出してくれた時、保谷紅司氏が「楠昔噺」の生駒山を出してくれた時、星野桔梗氏が「嫗山姥」をやつてくれた時など、私はその印刷されたプロを眺めてはひとりで嬉しがつてゐたのである。最近は和田春和氏が「大曇寺」を復活してゐるし、玄義の方でも近衞太夫氏が猿之助氏の薫陶に依つて「國性爺」の樓門や「嫗山姥」を出し始めたし、芳太郎氏の彌生會が古曲發表をやり出すと云ふし、——全く、私は自分が語る以上に、此方が嬉しいのである。要するに、私は自分がうまく語つて受けやうといふ氣はないし、何點取らうなどといふ打算はないし、たゞ私の惚れた作品が廢曲同然になつて居り、しかもそれらは、「太十」や「陣屋」よりも遙に近代性を持つてゐることを確信してゐるからである。

○

義太夫の將來とか發展などといふ事が最近よく問題になる。又もつと若いファンに呼びかけようなどといふ話も出る。しかし大體この論をなす人達の意見は見當違ひで、木によつて魚を求めてゐる感じが多分にある。

義太夫や歌舞伎は、謠曲や能と同じく、全く完成し切つたものである。完成し切つたものに發展はない。さうかと云つて謠曲や能のやうにソツと保存しておくのには、義太夫や歌舞伎芝居は、あまりに世俗的であり、色氣がありすぎ、體臭がありすぎる。ここに惱みがあり、又見當違ひの錯覺論が起きる原因がある。ではこれを將來活かすにはどうすればいゝか、其手段は——あるとすれば、其完成し切つた優秀な藝術を深く究めて行つて、その根本的な表現精神を正確に把握して、將來に飛躍させる事より他にない。それには何にも太棹の三味線や人形にこだはつた狹い意味に限る必要はない。——例へば、「菅原」の佐太村のやうな優秀な義太夫、(又は人形の演出)の表現精神を把握して將來に活かす場合、それ

は西洋音樂に依つて活がしても宜しい。西洋音樂に依つて義太夫の「佐太村」の表現精神が完全に再生され、「佐太村」以上の藝術となつて將來の人々の感覺に訴へる事が出來た曉には、義太夫の「佐太村」は滅ぼしても惜しくないし、又當然滅びるのである。そこ迄考へないで、現在の所謂新作物の如き、浪花節式の台本に、酒屋のフシ、合邦のフシ等々のフシの陳列會みたいな繼ぎ合せ細工で、若い青年達に感激を與へやうなどといふのは、牛肉を酢の物にして喰はせて美味がらせやうとするやうなもので、發展どころか、むしろ義太夫の退化であり、藝術の冒瀆である。

否定の否定＝肯定、否定を更に否定する事に依つて、より大きな肯定に到達する——ヘエゲルの辨證法的發展のみが玆に可能である。私の前に引用した「佐太村」の表現精神の例がこれである、義太夫の辨證法的發展である——こゝに新しき飛躍がある。それには、先づ義太夫人が義太夫を深く研究し、廣く院本を讀み古曲を檢討し、この優秀な藝術の根本的な表現精神を正確に摑むことに努力すべきだ。「テンネ」が耳ざわりだなどと云つてゐる場合ぢやないぞ。

○

次に若いファンを得たいと思ふならば、まづ若い者の感激が何處にあるかをよく省察してみる事だ。朝から晩まで義太夫の本を小脇に抱へてゐる僕なんかは、今の若さで、近代生活から置いてき堀にされた哀れむべき人間である。朝はモツアルトやハイドンに感激して、この洋樂の思想を浴びて、颯爽とオフイスへ出勤し、晝にはフロリダキツチンでビフテキを喰ひ、夕にはラヂオのシユーベルトをきゝ乍ら、冷やつこと胡瓜もみで米飯を喰ひ、やがて夜ともなれば義太夫のお俊の「世話しられても恩にきぬ」で涙をこぼす——さういふ工合に、複雜な近代人の生活に義太夫がとり入れられたのでなくては、ほんとうに義太夫が活きた事にはならない。——むしろ滅んだ方がいゝ位のものだ。首くゝりの足は引つ張つてやる方が慈悲になる。

いゝ洋樂、優秀な映畫、良き淨瑠璃の感激は何れも共通でなくてはならない。ところが洋樂洋畫を浮薄輕兆と貶して、狹い義太夫の塔の中に閉ぢ籠つて、薄暗い節穴の中から、外の明るさを覗いて舌うちをしてゐるやうな義太夫人の如何に多いかは、この正月同風會の挨拶の中に現はれた二三の人達の言葉でもよくわかる。これこそ義太夫が近代生活に見離される前兆である。ちつとは若い者の身にもなつてくれ。——僕は今日は、どうもヒポコンデリーのやうである。

○

扨、本誌から依賴された解說であるが、私は惚れてない作品は語る氣がしない如く、解說も好きでない義太夫に就いては書く氣がしない。惚れてない女と飯を喰つてるやうなもので氣乘りのしない事おびたゞしい。でも仕方がないから、一般に語られてゐるものの中で比較的好きなもの「沼津」「沓

掛」「講七」「三代記」「河庄」等と順次に書いて行くつもりだが、今回は寧ろ此序文で終りさうである。（前回の野崎村と此文と前後入れかへにすべきであつた）表現第一、内容第二の義太夫に對して私の態度は、かなり一方的に偏つてゐる見方ではあるが、私としては、嫌いなものを好きだと云ふわけには行かない。もし批評家にしても人間である以上、必ず好き嫌いはある筈で、それを抑へて絶對公平を標傍したところで、所詮は、批評家とは嘘つきといふ事と同義語になる。だから私は、自分の感情感覺一本槍で論をすゝめるつもりだ。當らずと雖も遠からずであり――遠からずと雖も當らずでもある。然し嘘つきよりもましだと思ふ。

○

僕は義太夫や芝居でよく泣く。寧ろ泣き蟲である。然し泣く個所が一寸一般の常識とは違つてゐる。「先代萩」の御殿だの「阿波鳴門」なんかでは決して泣けない。「袖萩祭文」の小娘が雪の中で着物をぬいで母に着せる所など、きらいである。そして何んでもないやうな個所で涙が出て止まらない事がある――例へば千本櫻の「椎の木」で、夕暮の野路の場面、悪者の權太が倅の善太の手をひいて家路を辿るところ、「冷めたい手だなあ」と子供の小さな手を髣ツ面にあてゝ頬ずりをしてやるところで、私は聲を上げるばかりに泣いて隣近所の看客をびつくりさせた事がある。後の夜の竹藪で主馬小金吾の切死するところも悲しい。もつと變なのは、芝居の「鈴ケ森」幡隨院長兵衛と白井權八の出會ひで泣く事である。つまり私の涙が出る原因は、因州因幡の鳥取と云ふ――娘が三人出ツ喰はす土地だから、あんまり感心した國でもなささうだが――遠い所から遙々と「お江戸は繁華と承はり武家奉公を望む所存」などと雲をつかむやうな一人旅をして來た若い美しい不良青年白井權八は、今で云へば氣車もなんにもない遠い僻地から、身よりたよりもない大都會へ、漠然と就職口を探しに來たわけである。權八が今夜着いたところは、眞ツ暗でよくわからないが、海の音がするところを見ると波打際らしい。鍛だたみが青いだけで、後ろは闇である。石塔が一つお化けのやうに立つてゐる。權八の眼には、遠くの漁火の灯影が泌みるやうに淋しかつたであらうし、空を見上ても、雨催ひで星さへ雲にかくれてしまつて、この女のやうに美しい前髪の若衆にウインクしてはくれないのである。その旅愁――それから長兵衛が賴もし氣に家へ訪ねて來いと云ふところ、――そんな事で私は泣いてしまふのである。だから、私の感覺は餘ツぽど變てこであるし、感情も又アブノーマルである。こんな感覺で義太夫の解說を書くのだから、前回の「野崎村」も、かなりトンチンカンであつたらうし、今後も又變てこな事を書くに違ひない。私に註文をした本誌の富取君も醉狂であるし、讀んで下さる方も因果である。だがまあ續けてやつて見るつもりだ。讀んで氣に入らなかつたら、子太郎つて奴は頭がどうかしてるんだと思つて下さつても宜しい。

ラヂオ漫評

金主丸

大阪女義〔四月廿四日〕

艶姿女舞衣

＝酒屋の段

彈語り　竹本小仙

今から思へば大分以前の事であるが、放送に於て、大阪の小仙、東京の越喜美等共に局寶であると唄はれた存在であつた。その東京の越喜美は引退して了ひ、小仙さんは、續いて我等東京のファンを堪能させて呉れてゐる。今度は暫らく振りのやうで、たしか、昨年の九月頃だつたとおもふ、引窓を同じく彈語りで放送した以來である。酒屋の前半は殆んど詞語りといつてもよい位であるから彈語りもさして苦にならぬが、それでも、常に絃の方のカケ聲もあつて、どうも我等は氣になつて困るのである。それは先づ致し方の無い事として、さて當夜の出來はどうだつたらうか。總評としては、遂に感心させられずにすんでしまひ、確かに期待に反したものであつたといはう。第一の欠點は宗岸が、はじめから泣き過ぎた事である。所謂泣きみそといふもので女の太夫さんは、此の弊に墮するのが多い。これまで泣かぬ宗岸がといふ本文もあれば、解り切ツた事であつて、愁ひを充分に持たせて、あすこまで泣かずにゐる譯にはゆかぬものだらうか。次に、時々、本にない助字を入れる癖？　よくやる所謂入れ言ではなく、半七が厭がるならば、といふやうに、イヤこれは我等の聽きちがひだつたかも知れぬが、さうした耳障りが二三ケ所あり、又た可なりに訛りが多かつたとおもつた。最後に、最もどうかとおもつたのは、肝心の聽かせ所とはいへさはりの全體が、あまりにも派手に唄つてしまつた事であつた。今少し、しんみりと、或はじツくりと、あの情景にふさはしい、おその心境を如實に表現して貰いたかつたのであつた。もう小仙さんなどは、たゞのタレギタと、同列には聽きたくないのである。ファンなればこその苦言である。

文樂中繼〔五月七日〕

卅三間堂棟由來

＝平太郎住家の段

竹本南部太夫
絃　鶴澤重造

文樂へ返り咲いて、やがては、越路太夫を襲がうといふ噂まである南部君、相當に毎回役もつくやうに見え、先づ以てめでたい。どうやら聽く度に、淨瑠璃に貫祿がついて來たやうであるのもよろしい。從來の美聲を節約して、ドツシリとした音づかひを用ゐ、勉强をしてゐるものと見え、伊達太夫君との距離を、更に引放したやうなのは、修業が違う、とい

ふものか、伊達君だつて勉強をしてゐるには違ひなからうが……さて、今夜の『柳』だが、先代南部の特意もの、即ちお家藝ともいへる語り物、これが悪くては仕やうがない譯である。はじめの紙一枚、無難に出來て、葉がくれや、を今一ト息とおもつたが、母は今を限りにて、のキカセドコロ、中々味をやり、悪く振り廻はさぬのは嬉しかつた。ノドの調子で、みどり丸がヒドク濁音で氣の毒な外平太郎も、母親も、就中、やはりお柳のコトバはかなり苦心したものらしくうなづけた。イヤ言ひそびれたが、後の『アレ〳〵あのマ雪の降ることわいの』あたりの母親と平太郎のやりとりが、どうも白ら〳〵しくて、しツくりした肝心の情緒がうかゞへなかつたのは、非常の缺點であつたとおもふ。一人の若を殘しおき、や、尊とき方の御惱み、や、其他、世話物としてか、みどり丸が總て『かゝさん〳〵』といふのと、平太郎が一度だけ『母人樣』と樣をつけたのが、おやとおもはせ、何にもお構ひなさるな、をお案じ下されますなと直してゐたのなど、それから、最初の方で『乳が無くとも育つべし』と『も』の字を加へたのは、近頃皆はかういふのかしらん、とおもつた。開幕前の時間を利用して、木谷蓬吟氏の解說を聽かせたが、アナウンサーの拙いのと、解說が堅過ぎて、一向に徹底しなかつたのと、舞台が變り、次はカケ合になる關係から、此の上るりの一番聽き所であるべき木遣り音頭が全然ヌキになつたのは、抑ものプランが悪いので、まことに困つた放送であつた。

文樂幹部　〔五月二日〕

假名手本忠臣藏　＝勘平内の段

竹本大隅太夫
絃　豊澤廣助

障はる事あつて、何としても間に合はず、遂に聽聞を斷念した此の一段。漫評の書けぬ申譯なさよりは、自分の殘念さの方が勝つた位、實は期待してゐたものであつた。

大阪女義　〔五月二十一日〕

碁太平記白名噺　＝揚屋の段

宮城野　豊竹此助
信夫　竹本雛昇
惣六　豊竹圓司
絃　豊澤小住

女義連のカケ合には、役に甲乙少なく恰好の演し物である。當夜は、時間も相當に充分なり、段切まで大に緊張して語つてゐて存外におもしろかつた。此助さんは我等の耳にお馴染が薄く、果して宮城野が適任であるかどうか、ちよつと豫斷が出來なかつたが、さて聽きしんで見ると、相當に花魁の品位も備はり『此の妹はまめなか知らぬ』以下の聽かせ處をじツとりと得心のゆく藝であり、『幸ひ奥の大騷ぎ―』と姉妹立退く身仕度の急迫感も先づは出てゐた。信夫の雛昇さんは、昨年寺子屋のカケ合で千代を勤め、最近中將姫を語つて其の美聲を發揮したのを覺えてをり、今夜のだゝアは五月田植の時分……以下の一人舞臺、充分に懸命

に、結構な出來であつたが、慾には、稍や老け過ぎたを憾みとする。團司さんの惣六、どうやら、一座の座長格、役柄も役柄、スツカリどすを利かして、似たりや〳〵花あやめ杜若―から、曾我物語を引く意見の長丁場、大芝居、大播磨屋、吉右衛門の聲帶寫になりかゝつたのには、少々恐れをなした。小住さんの絃、危なげの無い撥捌き、急所々々のカケ聲も、太夫を引立てゝ、語よさゝうに彈いてゐたのを賞めておく。

文樂座連　〔五月廿六日〕

伽羅先代萩　―政岡忠義の段

政岡　豐竹古靱太夫
鶴千代・八汐　竹本織太夫
千松　竹本雛太夫
榮御前　豐竹和泉太夫
沖の井　豐竹伊勢太夫
小牧　豐竹辰太夫
絃　鶴澤清六

古靱太夫の『先代萩』は、我等には初耳である。つばめ時代はよくも知らず、古靱となつてからは、恐らく文樂に上演されなかつたらうとおもふ。新聞の傳ふる所によれば、この御殿のカケ合は、松竹が再三文樂上演を交渉して實現しなかつたものといふ。とにかく、珍らしい聽きものである。先づ、その配役を見ても彼れの一門をすぐつての放送、適材適所とうなづける。押明け入りにけり、からの出、例の莊重典雅、金襖の格に嵌まつてゐる事勿論で、思はず襟を正さしむるものがあつた。『物案じなる母親の、顏をながむる千松に』と『鶴喜代君も打守り』の織太夫との變り目、オヤツとおもふほど區別が付かず、織さんよくも師匠に似たるものかなと、今更ながらほゝゑまれた。『其御膳を上げるほどなれば』以下政岡の詞、頗る徹底して斷然押へてゐた。竹太夫改め雛太夫の千松は大役であつて『何共ないと澁面作り、涙は出づれど稚氣に』のあたり、大外れに外れて苦しげであつたが、後に漸やく軌道に乘つた。蓋し、古靱氏に合はした絃の調子の低い爲めに、この現象?を呈してしまつたのであらうと思つた。まゝ焚きのくだり、雀の唄のあたり、雛太夫も懸命に必らずや大汗であつたらうと想察されたが『いはれて涙の聲はり上げ―』など中々可かつた。屏風にひしと、のあたり『稚なけれとも天然の』から『心の奥のしのぶ山、忍び涙の折からに』まで、紙なら五六枚をぬいたのは時間の都合であつたらう。榮御前の出、和泉太夫は頗る愼んで語つてゐて、先づは無事。二タ役織太夫の八汐は、可なりの苦心が拂はれてゐて甚だ結構。千松を突いての一くだり、荒れ狂ふが如き事なしに憎みも充分ひねきの我等を堪能させた。最後の、政岡のクドキ、礎ぞや、千年萬年待つたとて、など、可なりに古靱さんのノドを苦しめたらしいが、無論些かの破綻を示さず『後ろにすツクと八汐が大聲』と本文通り結末をつけ『てん手に一腰長刀も、きらめき渡る』でチョンになり、一時間と十分の長丁場は終つたのであつた。辰太夫の小牧が、大層その人らしかつたのを特筆しておく。絃の清六は、さぞ骨の

折れた事であらうと、慰勞の辭を呈するものである。

東京床語　〔五月廿八日〕

花上野譽の石碑

＝志渡寺の段

豐竹巖太夫
絃豐澤猿藏

巖さんは昨年の夏、安達の三を放送してから久し振りとおもふが、今度の志渡寺は、先づ好い語り物を選んだといへやう『泣く〳〵立つてゆく……』の語り出しから、源太左衞門を芯にして、相當手强く、且つ、かなり練習も工夫もついて居たやうである。いつものやうに、だらついても居らず、內記も、すがの谷も、舞臺の心得があるだけに、詞など間が取れてゐてよろしい。僕がいつも難かしいとおもふ方丈の詞も、相當苦心の痕が見えて、やゝ年輩が若過ぎたが、先づ〳〵と受取れた。『あはやと見る內廣庭よりこけつ轉びつ乳母お辻』は少々困ッた、といふほど氣の毒ながら拙かつた。それに、お辻は、總體に於て、息も絕えだえの斷食をしてゐる女性とは聞こえなかつた。それは、此の上るりの最も大切な失敗であり、時間の都合で肝腎の坊太郎の砂書き以下が出せなかつたのも、筋の通らぬ太だしい憾みであつた。猿藏の絃御苦勞々々々と申上げておく。

皇風厚生莊

小學卒業生上級編入に就ての一條たる體力の考査で不合格となり入學出來ぬ本人の落膽は勿論、家族の憂慮は扨て何うしたらよいものか、ただ遊ばせて置けば決してよい事は覺えず、去りとて身體が健康になるといふ譯でもなく生涯を不幸に暮らすことになる。更に國家としてもまた次の時代を背負つて立つ國民として役立たせることが出來ぬとすれば如何のものか、こゝに新東亞建設の參加に落伍者を生ずる青少年教育の缺陷が見出される。それは國家として義務教育たる小學生時代には養護學級などもあつて相當保護されてあるが、一たん小學校を卒業した後の學校教育には健康體をより健康體にする方針のみで虛弱體を健康體とする段階が顧みられない、そこで無理に何處かの學校に入れても中途休學退學乃至は死亡といふ取返しのつかぬ結果となつて悔んでも後の祭りとなる、それ等が徵兵檢査のときに體位の向下の主たる原因となるので、寔に國家としての不祥事であるといふ憂國慨世の念から、小田急江の島線で新宿から約一時間の新長後驛近き相模殖產學校ではその一部を開放して皇風厚生莊を皇紀二千六百年の紀念事業として二月十一日の紀元節を以て創立し四月三日の神武天皇祭に開莊式を擧げたが、主として虛弱體の小學卒業生を收容することゝなつた。莊長は渡邊信雄氏、理事教務主任は中野準三郎（三允）氏である。

素義人描影

安藤どくろ氏の『忠四』

内田富太郎

無名會五月特別公演で安藤どくろ氏の「忠臣藏四段目」判官切腹の段を聽いた。これは氏の傑作の一つで、氣魄描線共にがつしりと整つて充實した一段であつた。

氏の淨瑠璃は其の本質特性に於ては異つてゐるけれど、千鶴、旭、兩氏と藝脈がどこか共通してゐて本格的に正攻法で語る。奥へ行く程底力が出て來る。藝腕が逞ましい堅實な魅力を創造して行く。卒直に放言すれば、どくろ氏は無器用人の大成せんとしつつある藝格を偲はせる。從つて小手を使つて情韻を醸し出したり咽喉で廻して小味を聽かせるやうな纖細な演出は求められないが、良き意味の正格的な生一本さで些のケレンもなく、正面から淨瑠璃と四つに取組んで實力本位でどつしりと地味に根强く、時に放膽な迫力を鮮示しつつ急所を描現する技藝が微塵の嫌味がなく雄厚な藝格を漂はせる。

「忠四」は「忠九」と俱に忠臣藏中の大物紋下藝とも云はれる「腹で」表現する語り物である。從つてこの一段に限つては如何に技巧が完璧の人でも技巧のみでは所詮どうすることも出來得ない至難さが作品の奥底に淵々と流れてゐる。

どくろ氏は腹で語る「忠四」を充分腹藝でしめて行く演出がピッタリとこの淨瑠璃の眞髄に合致して適切な良さを示現する。

「鹽谷判官閑居に依つて……」

のマクラが先づ嚴粛で莊重な氣韻が沈潛してゐて良い。

九太夫郷右工門のやりとりを省いて「入り」では四段目の雰圍氣は醸成されない、傲岸な面憎くさと共に其の胸底に渦捲く師直の或る意味で代辯者とも思はれる、執拗な敵慨心が鋭くからみついて行く處にこの大物表現の妙味があると思ふ。氏は克く藥師寺の個性を的確に把握して性格的に描寫してゐる。

「コレ〳〵判官默り召され……」

でかぶせるようにのしかかつて行く氣組に突張りのたしかさと憎し味が漲つて佳良だつた。

「顴膨らして閉口す……」

もにがり切つてやり場のない敵意の鬱積を直載に鮮描する。

次に判官を小手先の技巧を用ひずにじつくりと腹で描寫する、沈痛な悲愁をにじませて正調である。……ふくらみのある優美な氣品には淡いけれど、死を覺悟した靜澄な心を内攻的に表現した。

「諸氏は返す詞もなく」

の邊り悲影愁々として心を包む沈愁を描出して優れてゐた。

「無念の涙はらはら〳〵」

は痛恨肝に徹する大星の血涙を仄溢い餘韻の中に重厚に描映して雄拔な底力があつた。

「御菩提所へと急ぎ行く」

……の切り處まで終始沈鬱な哀愁を陰影深く細部的には多少荒削りで稍精力的な放膽さを窺知させる個所もあるが、じつくりと引締めて、陰影を加味し乍ら重厚に語つて含蓄のある秀拔な「忠四」であつた。

ガラ〳〵と派手に安手に怒鳴り立てるだけ來る上使は石堂右馬之亟……」になる。

氏は師直の昵近藥師寺が傲慢不遜で大いに精彩を發揮する、私見を寸述すれば四段目の前半は師直方のこの藥師寺の表現が判官の沈痛な青白い哀傷をモリ上げ、上使石堂の思慮深い武士の情を流露させる重要なポイントである。

淨界消息

▼**吉野井筒氏**　奉天市吉野井筒氏は名古屋に於ける故岩崎筑後氏(同氏の義兄)の追善淨瑠璃大會を五月八日名古屋市住吉町中劵番演舞場にて催ほし、奉天より同行の田中胡蝶氏に名古屋の初城、揚月氏の外東京より國聲氏大垣よりは十八公氏が出演した。

▼**岡田蝶花形氏**　毎月一回晝食をし乍ら義太夫の話をし合はうといふ「淨瑠璃研究座談會」を組織し、その第一回は大阪より上京の鴻池幸武、武智鐵二の兩氏の歡迎を兼ね、五月廿五日正午より日比谷三信ビル東洋軒に於て開催。

▼**河野國聲氏**　三月以來五十日近くも滿支旅行にて久しく淨界の人々と顏を合はさなかつた同氏は、同趣同好の諸氏を招き、留守中の淨曲界噂さ話を聞いたり、氏の見た滿鮮支の情況や同地方淨界の土產話などをする催ほしを五月廿九日午後二時より歌舞伎座前「辨松」で開いた。

▼**名作淨瑠璃同好會**　第七回は前號所報の通り六月三日午後一時より電氣倶樂部に於て開催したが、八雲氏は病氣にて宮古氏は咽喉障害にていづれも休演したので、川口子太郎氏は氏の持役の外右兩氏の持役「東天紅」と「筑紫飛梅」を代演。なほ秋季大會の第八回には聽衆の希望に依り第一回公演の「ひらかな盛衰記」を更に大序、序切二段目口を增補して再演する事になつた。

▼**南北座の東京淨瑠璃**　人形芝居は六月三日より三日間日本橋倶樂部に公演し、紀元二千六百年を記念して「日本振袖始」を出雲長者館より大蛇退治まで上演したが、南北座主宰池田三國氏は岩永姫實は大蛇の役にてその鮮やかな技藝に好評を博した。

▼**淨曲鳥の會**　鈴木兒雀氏は病氣の爲め山鳥、淸雀、つばめ、千鶴の四氏を以て六月九日錦橋閣で第八回を開催。

▼**淨聲會の豐橋行**　豐竹益太夫主催の豐橋市に於ける出征遺家族慰安會に山生乃菊、林昇、義昇、紫蝶五氏の淨聲會を主として、それに叶氏も參加出演する模樣であるが、時期は六月中旬、一行は先づ豐川稻荷に武運長久を祈る事になつてゐる。

▼**綾秀會**　綾秀會は六月五日夜西巢鴨小倉邸に於て催し、翠松(十種香)司光(太十)龍司(中將姫)彌樂(先代)壽光(壺坂)壽瓢(油屋)の諸氏が出演六月八日は駒形倶樂部に開催。

▼**關東義太夫聯合大會**　大會流行の今日豐澤扇之助師の父吉田氏は古曲文藝義太夫普及會といふものを組織し、六月十八、九の兩日並木倶樂部で大會を開催。

▼**蘇水氏歡迎會**　十三年六月北支に從軍した三好會々員蘇水氏の歸鄕を迎へ、春日町の「大國」に歡迎會を開いた同會は、六月六日淀橋倶樂部に於て更に歡迎義太夫會を開催。(柳、つま子。日吉、喜し香。太十、日好。菅四、美蝶。新口蘇水。絃、三好、仲三郎)因に蘇水氏は本

月十三日再び北支へ出立。

▼**素玄淨曲研究會** 六月廿二日開催第廿二回の同會は會場を麹町公會堂に變更し、番組は辨慶（義昌、駒登太夫）酒屋（英、綱助）戻橋（山生、鹿重）宿屋（素八、素一）なほ次回は七月十七日相互倶樂部に開催。

▼**淨雲會** 淨雲會の第五回は六月廿七、八の兩日文化倶樂部に於て、初日は纒十（光玉、佳照）鮨屋（柳光、佳照）酒屋（都竹、都太夫）辨慶（義昌、駒登太夫）宿屋（其角、松四郎）三代記（文盛、粂造）二日目どんぶりこ（子太郎、和孝）岸姫（美津豆、和光）合邦（一司、蟻鳳）太十（晋水、和光）杖折檻（中次、和孝）新口（都昇、都太夫）の番組が決定した。なほ七月より野田高尾氏が入會。

▼**井上泉氏** 六月廿六日より三日間淺草松屋ホールにて出征將士家族慰安義太夫會を阪東勝治身振劇入にて開催。出演者は正鳳、喜鳳、昇、いろは、淸、操、榮、喜鶴、大嘉津、山生、千晴、有明、三由、乃菊、和舟、紫蝶の諸氏。

▼**玉水吟青氏** 野澤道之助連の玉水吟青氏は第卅二回東都五十義會にて二等に入賞をしたので、六月十日文化倶樂部で入賞祝賀義太夫會を開催。

▼**野澤粂一郎師** 秋枝長門氏は野澤粂造師の門下として野澤粂一郎を名乗り日本因會に入會、その披露義太夫會を沼井盛鶴氏を始め粂造連の後援にて五月廿四日並木倶樂部で開催した。

▼**三田柏秀氏の急逝** 豊澤良造連の三田柏秀氏は、六月四日夜「太十」を語り乍ら發病して相互倶樂部の高座で卒倒したので、家族の駈けつけるのを安閑と待つては居れず、さりとて聽衆の手前次の語り手も師匠も高座へ上がらねばならずそこで同僚の宮原以興子さんはさそくの機轉で板戸をはづして擔架に利用、側に居合はせた扇賀太夫を賴んで二人で飯田橋病院へ柏秀氏を運んださうだが、何しろ一人は婦人の事であり、相手は扇賀さん、あつちへよろ〳〵、こつちへひよろ〳〵、あの賑かな神樂坂の通りをよろめき乍らよくも病院まで運べたもの。

▼**上杉欣聲氏追善** 五月十六日逝去された文盛氏の嚴父上杉欣聲氏の追善義太夫會が六月二十日正午より並木倶樂部で開催されるが當日は初手向として未亡人藤仲氏が團龍の絃で「勘作」を追手向として文盛氏が粂造の絃で「岡崎」を演じ淨雲會は（十次郎、都昇。初菊、子太郎。操、都竹。皐月、一司。久吉、美津豆。光秀、其角。絃、都太夫）にて「太十」を團龍連は（勝賴、屋富。八重垣姫、福村。濡衣、壽美枝。絃、團龍）で「十種香」を、粂造連は（久作、春和。久松、文盛。お染、喜國。お光、都。母、盛鶴。絃、粂造、ツレ、糸枝、福枝）にて「野崎」をそれ〳〵掛合を上演する外、都太夫、蟻鳳、粂造、和孝、松四郎、粂一郎、佳照、播磨一、和光、團龍の各師連中より多數出演する筈である。

▼**鶴澤紋敎** 鶴澤紋敎師は兩親北島喜平、同のいさんの追善義太夫會を竹本米

翁、竹本越駒、竹本小津賀、竹本津賀昇芝要會、芝海會の後援で六月八日午後二時より並木倶樂部で催ほした。

名古屋の清々會

名古屋市に於ける清々會は春季淨瑠璃大會を五月廿四、五の兩日午後四時より浪越演舞場に於て賑々しく開催した。

〔初日〕宿屋(芝鶴)日吉(小清)陣屋(吉卜)忠四(宇津保)合邦(五色)太十(菊井)壺坂(三星)忠六(金昇)沼津(正鳳)寺子屋(仙昇)

〔二日目〕柳(芝鶴)白石(政江)合邦(勇)壺坂(音羽)椎の木(揚月)太十(麓)合邦(義鳳)新口(三笠)陣屋(自狂)玉三(紋司)絃(新吉、綱彌、長昇、住繁、壽、綱廣、旭昇、越友、長榮、寛彌、清一)

忍ぶ面影

文樂座が植村家より松竹の經營に移つて以來の紋下は竹本攝津大掾、竹本綱太夫、竹本越路太夫、初代吉田玉造、五代目豊澤廣助、六代目廣助事名庭絃阿彌、六代目野澤吉兵衛、二代目桐竹紋十郎であるが、今回皇紀二千六百年を奉祝記念する爲め、現紋下竹本津太夫氏は白井松竹社長と相圖つて、この歴代故紋下の肖像を文樂座に掲げ以て榮譽ある紋下の地位と德望を後世まで讃える事になつた。

大日本素人淨瑠璃會

大阪に於ける同會は前號所報の通り五月廿四日より四日間文樂座にて大盛會裡に終了したが、東京からは保谷紅司氏が採點に細川清氏は無審査に出演、審査の結果は本號編輯締切に間に合はず、次號に掲載。

素義勉强會生る

木村一司、米澤雅樂氏が奔走をして、鶴澤綱助師に依り素義勉强會が生れ、六月十五日午後六時から淀橋倶樂部で第一回を催ほした。

安達(一司)儀作(雅樂)沼津(二樂)柳(紅司)合邦(隅斗)逆櫓(潮)絃(綱助)

紀元二千六百年記念出版

帝都素義名鑑

本名鑑出でゝ後ち名鑑なし

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。
▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。
▽特種の催ほしの外前置きを略します。

——記者——

十週年記念 兜會春季大會

兜町の素義團體を以て組織せられた『兜會』は、昭和六年一月廿五日地元茅場町清水ビルホールに於て華々しく發會式を擧行し、豪華絢爛たる限りをつくして流石帝都株式界の華やかさを思はしめたが、今回同會は十週年を迎へたので紀元二千六百年を奉祝すると共に、この芽出度十週年を記念し、來る六月廿三日午前十時より日本橋倶樂部に於て記念春季大會を開催する事になつた。

同會の初代會長は鈴木松寶氏に始まり次いで中澤巴氏、現在は鈴木和樂氏を會長として副會長には近江清華氏が就任せられ、中澤巴、鈴木松寶氏を相談役に、寺岡三幸、桑原美峰の兩氏の外京都福田喜撰氏を名譽顧問に推戴し、本多可笑氏を幹事長として全員が幹事となり、他に見られぬ和合團體として會の發展向上に努力してゐる。大會の番組は左の通り、なほ關西よりも應援出演者のある模樣で番組は大阪へ註文をして古式に倣つた珍らしい印刷物が出來上り、記念品やら景品やらその豪華さは帝都淨界の人氣を集めてゐる。

車引（時平公、美浪。松王丸、可笑。梅王丸、團壽。櫻丸、もみじ。杉王丸三葵。絃良造）帶屋（和可葉、猿三郎）寺子屋（もみじ、和光）先代（三葵、寛三郎）忠六（團壽、和光）二度目（美浪、猿三郎）忠九（清華、觀西翁）…休憩…本下（加留保、龜造）十種香（春樂、猿之助）太十（泉、寛三郎）新口（美峰、猿之助）…休憩… 湊町（朝正、寛三郎）五斗（松蝶、米翁）沼津（兜、絃平）吃又（和樂、猿藏）…休憩…壺坂（其晶、寛三郎）岸姫（三幸、東）合邦前（松寶、團八）同奥（巴、猿藏）…… 船別れ（八雲、芳太郎）大切（掛合）宿屋（朝顏、美峰。次郎左工門、清華。岩代、松寶。德右工門、三幸。下女、巴。若侍、和樂。絃、猿之助、琴、松四郎）

淨曲無名會大會

淨曲無名會は河野國聲氏永々の旅行にて延期してゐた春季大會を六月十二日午後四時より日本橋倶樂部に開催して滿員の盛況を呈した。

五聲會春季大會

井上聲鳳氏を會長とする同會の春季大會は、五月廿一日夕より丸の内蠶糸會館に於て開催し、聲鳳氏の「日蓮記」は初演の由であるが、野澤吉兵衛の絃で堂々その貫錄を示した。

油屋(桔梗、綱助)陣屋(操、道之助)沼津(どくろ、司好、好造)安達(國聲、猿三郎)堀川(美峰、猿之助。ツレ、松四郎)菅四(菅若、宗之助)山名屋(松樂、染登)玉三(三芳、猿藏)忠六(茂里雄、猿平)日蓮記(聲鳳、吉兵衛)

東都女天會大會

本會は初め叶、里芳、歸世花、登盛、巴雀の五氏を以て組織され、中途より巴雀氏は退會し、千賀子、津ぼ美、加光氏などが入會し毎月例會を開催して來たものであるが、今回更に月美、翠松、平之助、叶昇、ひばり、喜樂、茂玉、金龍、扇華、千島、博子、福代、みのり、富春歌子の諸氏を加へ事務所を黑川叶氏方に置いて東都素義婦人の一團體が成立したので、六月六日午前十時よりその記念大會が並木倶樂部に於て開催された。

太十(光秀、ひばり。十次郎、津ぼ美。初菊、翠松。操、加光。久吉、里芳。皐月、登盛。絃、粂造)酒屋(叶、扇之助)玉三(里芳、勝助)鈴ケ森(津ぼ美、扇之助)沼津(喜樂、勝助)又助(茂玉、扇之助)日吉(金龍、駒登太夫)太十(扇華、扇之助)白石(加光、仙彌)安達(千島、延左工門)八陣(登盛、粂造)壺坂(月美、扇之助)本下(若狹之助、里芳。三千歳姫、登盛。本藏、歸世花。番左工門、博子。下部、津ぼ美。絃、勝助)…休憩…山名屋(福代、三福)菅四(歸世花、扇之助)柳(叶昇、素昇)辨慶(みのり、延左工門)梅由(平之助、素昇)合邦(富春、勝八)儀作(歌子、勝助)鮨屋(博子、素昇)堀川(與次郎、叶。傳兵衛、博子。お俊、ひばり。お鶴、翠松。母、歸世花。絃、扇之助。ツレ、絃內)

中老會春季大會

同會の第廿二回公演は五月廿八日午後二時半より左の番組により並木倶樂部に於て開催。

先代(有明、松榮)忠四(奇聲、和歌吉)山形屋(盛鶴、粂造)美濃屋(越巴、和歌吉)酒屋(松玉、扇之助)忠六(茂里雄、猿平)橋本(操、道之助)沼津(あるを、粂造)大晏寺(春和、絃平)大切鮨屋(權太、松玉。維盛、春和。彌左工門、越巴。女房、あるを。お里、操。內侍、奇聲。梶原、盛鶴。六代君、有明、村役人、茂里雄。絃、粂造)

なほ同會は六月廿四、五の兩日松本市松本劇場に出演する事になり、同地方の應援團に非常な人氣を呈してゐる。

東都杏義會の誕生

本部を大阪の樋口氏方に、事務所を東京の岡田氏方に置いて日本醫師素義聯盟が創立されたが、同聯盟は杏義會の名稱で先づ第一回を七月十四日午後六時より電氣倶樂部に於て開催する事になつた。聯盟の發企人は東京(緒方千晴、橋本三司、藤牧淡路、山中花仙、久保燧洋、箕浦其甫、一松美利、岡田蝶花形)大阪(岡田吳山、太田垣離鶴)神戸(池田雷子)德島(粟飯原司龍、齋藤鳴門)大分(足立延壽)岡山(川口)京都(田中)の諸氏で顧問として眞鍋嘉一郎、安藤畫一、本田雄五郎氏がある。第一回番組左の通り。

妙心寺(蝶花形、良造)新口(淡路、仙玉)沼津(三司、猿三郎)山名屋(其甫、猿藏)陣屋(千晴、團市)堀川(花仙、猿之助)

因會 女子部後援會

同會の第四回演奏會は五月廿八日並木倶樂部に開催。

玉三(佳世子、佳仙)新口(巴駒、巴住)寺子屋(綾千代、猿玉)沼津(昇登、巴住)戀十(清司、猿王)阿漕(彌周、三生)先代前(重子、勝八)同奧(住若、清一)岸姫(素昇、猿玉)紙治(團雀、清二)太十(駒龍、津賀昇)野崎(和佐之助、猿女)十種香(越駒、紋敎)

なほ第五回は同く並木倶樂部にて六月廿八日午後四時半より開催。番組左の通り。

日蓮記(佳世子、佳仙)八陣(梅葉、駒清)寺子屋(團蝶、猿幸)又助(佳仙、仙照)帶屋(越道、巴住)安達(津多惠、好一)河庄(小津賀、紋敎)先代(駒鈴、駒清)儀作(若好、清二)志度寺(猿春、三生)鳴門(光助、清二)宿屋(佳照、清一)

女義若女會

女義若女會は第五回を六月一日午後六時より東橋亭にて開催。

宿屋(素國、素丸)玉三(素次、駒清)

竹本小和光淨瑠璃會

六月六日午後三時半より日本橋倶樂部に於て、竹本小和光淨瑠璃會が同師後援會の主催で催された。小和光師は十三歳より竹本和光師の門に入り今日に至つたもので、當日は後援者各方面より花輪、久壽玉、肩衣其他の贈り物は廊下一杯に飾られ、聽衆の奇麗處を以て近頃珍らしい盛會を極め、小和光師は「安達」祭文より段切まで力演して喝采を博した。番組は左の通り。

三番叟(小和華、輝子、清三、小和光)十種香より狐火迄(勝賴、吳洲。八重垣姫、光玉。濡衣、和子。謙信、六郎、小文治、勝藤。絃、清二、清三、琴、小和光)揚屋(雛代、和歌八)先代(吳洲、駒清)堀川(、勝藤、清三、小和光)酒屋(和子、清二)岡崎(和光、種子)松王屋敷(駒鈴、駒清)草履打(若好、清二)安達(小和光、清三)野崎村(お光、小和華、お染、駒鈴。久作、若好久松、輝子。母、小和光。絃、駒清、ツレ、清二、清三)野崎(素八、素一)寺子屋(小津賀、紋敎)酒屋(素廣、駒登久)太十(重子、勝八)

東都國技會の新生

先月東都義太夫會を開催した近藤鳳氏は今回東都素義國技會を組織し、男女二流に分けて毎月十日を例會日としてその第一回を男流の部で六月十日並木倶樂部に開催。同會の役員は主事近藤鳳、男幹事中田五口、女幹事神馬里芳、正會員國友東光、及川旭、上田上誠、岡本柳光、須田美義、湯淺光玉、國友八千代、吉田登盛、濃沼薫の諸氏に顧問には島うつぼ黑川叶氏がなつてゐる。

本下(鳳、紋左工門)鮨屋(柳光、佳照)岸姫(美義、駒登)戀十(光玉、佳照)油屋(上誠、播磨一)志度寺(東光、重之助)紙治(五口、道之助)岡崎(旭、道之助)引窓(うつぼ、絃平)以上切二枚及び口は据置きにて他は順廻り出演。

二五〇號記念 淨瑠璃時報 義太夫大會

同業淨瑠璃時報二百五十號記念義太夫大會は六月十三、十四の兩日午前十時より日本橋倶樂部に開催、多數の出演の外に餘興素劇を加へ非常な盛況を呈した。(本號編輯までに番組の寄贈なく乍遺憾出演者語り物等は省略)

大阪文樂座の東上

大阪文樂座人形淨瑠璃は若手一黨にて八月一日東上に決定。

兜會の櫻樹献金

兜會は今回十周年を記念し、都新聞社を通じて金百圓を献金した。

金田金鳳氏類燒

五月三十一日午後三時廿五分頃淺草雷門二ノ六仲見世寺尾玩具店より發火し、本誌名譽會員金田金鳳氏經營の鳥料理「金田」は一部類燒した。

本誌後援名譽會員

（イロハ順）

（東京之部）

廣瀨いろは氏　木村一司氏　宮原以與子氏　吉川浪補氏　櫻井呂光氏　阿部一氏　橋本梅月氏　菅原葉光氏　菅田梅笑氏　北島北斗氏　佐藤平之助氏　中澤巴氏　安藤どくろ氏　吉田登盛氏　小川都山氏　安藤都竹氏　安藤昇氏　保々長平氏　緒方千晴氏

栗原千鶴氏　久米中次氏　岸竹史氏　松本千鳥氏　神馬里芳氏　岡本柳光氏　林昇氏　本木大熊氏　鈴木和樂氏　小林和舟氏　林和勢氏　青山和狂氏　鈴木和勇氏　飛石かなめ氏　加藤兜氏　高橋可遊氏　西田可松氏　黑川叶氏　高山和子氏　大用大嘉津氏

小森叶昇氏　田口辰壽氏　疋田大龍氏　井上巽氏　小林太二八氏　根本團壽氏　野田高尾氏　杉山橘氏　坂倉素遊氏　新川月美氏　川口子太郎氏　小埜長とろ氏　宮本武藏氏　萩原うつぼ氏　乃村乃菊氏　中野吳羽氏　石川華笑氏　本城之冠生氏　山下彌生氏　國井やまと氏　岡田彌聲氏　松林福笑氏　長谷川文久氏

川田二三樂氏　鈴木兒雀氏　安藤光樂氏　水戸部壽氏　原田越巴氏　河野國聲氏　松岡語松氏　田中湖月氏　湯淺光玉氏　保谷紅司氏　山崎向陽氏　岡崎円六氏　堂野前鐵幹氏　寶藏寺天昇氏　大築葵氏　及川旭氏　柳川有明氏　中川愛氏　奥村三玉氏　寺岡三幸氏　木村さかえ氏　齋藤生氏　平井榮氏

橋本三司氏　細川清氏　金田金鳳氏　錦錦松氏　淺田奇聲氏　星野桔梗氏　日野金泉氏　前島貴昇氏　歸山歸世花氏　平井軌外氏　橋本掬月氏　乾桔梗氏　增田喜城氏　增田喜香氏　三浦鏡鳳氏　澤部其角氏　岩木義雀氏　吉良蟻若氏　山田義昇氏　三並義昌氏　保坂有曲氏　岩田末成氏　高瀨操氏

吉田美地句氏　横井三由氏　野口みなと氏　北村三葵氏　池田三國氏　吉田三芳氏　高橋宮古氏　村上美津豆氏　須田美義氏　鈴木松寶氏　小原松樂氏　勝田松雨氏　菊池秋月氏　花房紫蝶氏　平井壽樂氏　山田壽瓢氏　田口司重氏　倉田司樂氏　濱口秋華氏　打矢晉水氏　武笠宏亮氏　高品一重氏　平山平茶氏

桑原美峰氏　池田美尚氏　魚崎美福氏　松岡茂里雄氏　白井清華氏　近江清華氏　塚口清雀氏　富岡生昇氏　沼井盛鶴氏　時田靜史氏　關口靜香氏　仁木翠松氏

（地方之部）

米國平野一昇氏　同武榮玉氏　同杉山陶岳氏　同兼廣廣玉氏　同西本西紫氏　大阪氏家鶴峰氏　神戸岡田源氏　大垣吉岡十八公氏　船橋川奈部銀司氏　下關保良鈴鳳氏

横濱和田和朝氏　同霜島錦司氏　平塚市鈴木香雀氏　同國森鳴門氏　八幡古賀大彌氏　安東市岩崎山彥氏

新名譽會員

佐藤平之助氏

平塚市　國森鳴門氏

本誌後援名譽會員を御快諾賜り難有奉深謝候

太棹社

當座帳

▽鈴木和樂氏　發病以來永々熱海にて靜養中であつた同氏は此頃大森の自邸に歸り目下靜養中である。

▼杉山語樂氏　五月十一日夜自動車の爲め怪我をして淺草壽町の村上外科へ入院

▽鈴木和勇氏　世田谷區北澤町二丁目二四八番地へ轉居。

▼豐澤芳太郎師　酒寮「よしの」を開店以來多忙の爲め五月より蠣殼町へ出張を中止。稽古は「よしの」にて。

訃報

豐岡さだ子氏　山田義昇氏夫人養母さだ子さんは腦溢血にて五月十三日永眠、廿九日通夜を營み卅日向島自宅にて告別式を執行、享年五十三。

上杉欣聲氏　文盛氏の嚴父上杉欣聲氏は五月十六日永眠、十八日自宅に於て告別式が行はれた。享年七十。

三田柏秀氏　六月四日腦溢血にて急逝、享年五十二。

豐澤新次郎氏　五月十一日死去。

右謹んで哀悼の意を表す。

太棹社

編輯後記

★初夏絶好の季節皆々様の愈々御健勝を慶賀申上ます。

★最近本誌愛讀者の增加した事は素晴らしいもので、偏に皆様の御援助の賜と厚く御禮申上ます。何しろ地方だけでも本年に入つて二百以上の激增でありますから、本誌もいよ〳〵第三種の必要を生じ目下遞信局へ出願中であります。就ては此際讀者倍加運動を起し皇紀二千六百年を記念に、より一層の進展を致したいと存じます。それには皆様より御一名一人づゝ新讀者を御紹介賜りますれば、今までの千名の讀者が忽ち二千名になりますわけで、何卒御援助の程を御願ひ申し上げます。

★次に夏の讀物として『高座しくぢり話』を募集致します、何卒面白くおかしく御投稿を願上ます。

★西村游史氏、新藤泰觀氏からも御寄稿をいたゞいてありますが次號に掲載致します。

—芳河士—

定價　一部　金三十錢　郵稅三錢
六月分　金一圓八十錢　郵稅共
一年分　金三圓　郵稅共

廣告料　普通　一頁　金貳拾圓
特別　一頁　金參拾圓

第百十五號　（毎月一回十日發行）

昭和十五年六月八日印刷納本
昭和十五年六月十日發行
東京市小石川區音羽二丁目四
編輯兼發行人　富取壽鹿
東京市牛込區早稻田町五八
印刷人　栗原榮松
東京市牛込區早稻田町五八
印刷所　栗原印刷所
電話牛込一四五一番
東京市小石川區音羽二丁目四
發行所　太棹社
振替東京三二七八五番

▼記念寫眞揭載料は一頁金拾五圓申受ます
▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なる可く振替に御送金の事
▼郵券代用は一割增但三錢切手の事

當座帳

▽鈴木和樂氏　發病以來永々熱海にて靜養中であつた同氏は此頃大森の自邸に歸り目下靜養中である。

▼杉山語樂氏　五月十一日夜自動車の爲め怪我をして淺草壽町の村上外科へ入院

▽鈴木和勇氏　世田谷區北澤町二丁目二四八番地へ轉居。

▼豐澤芳太郎師　酒寮「よしの」を開店以來多忙の爲め五月より蠣殼町へ出張を中止。稽古は「よしの」にて。

訃報

豐岡さだ子氏　山田義昇氏夫人養母さだ子さんは腦溢血にて五月十三日永眠、廿九日通夜を營み卅日向島自宅にて告別式を執行、享年五十三。

上杉欣聲氏　文盛氏の嚴父上杉欣聲氏は五月十六日永眠、十八日自宅に於て告別式が行はれた。享年七十。

三田柏秀氏　六月四日腦溢血にて急逝、享年五十二。

豐澤新次郎氏　五月十一日死去。

右謹んで哀悼の意を表す。

太棹社

編輯後記

★初夏絶好の季節皆々樣の愈々御健勝を慶賀申上ます。

★最近本誌愛讀者の增加した事は素晴らしいもので、偏に皆樣の御援助の賜と厚く御禮申上ます。何じろ地方だけでも本年に入つて二百以上の激增でありますから、本誌もいよ〳〵第三種の必要を生じ目下遞信局へ出願中であります。就ては此際讀者倍加運動を起し皇紀二千六百年を記念に、より一層の進展を致したいと存じます。それには皆樣より御一名一人づゝ新讀者を御紹介賜りますれば、今までの千名の讀者が忽ち二千名になりますわけで、何卒御援助の程を御願ひ申し上げます。

★次に夏の讀物として『高座しくぢり話』を募集致します、何卒面白くおかしく御投稿を願上ます。

★西村游史氏、新藤泰觀氏からも御寄稿をいたゞいてありますが次號に掲載致します。

—芳河士—

第百十五號　（毎月一回十日發行）

定價
一部　金三十錢　郵稅三錢
六月分　金一圓八十錢　郵稅共
一年分　金三圓　郵稅共

廣告料
普通　一頁　金貳拾圓
特別　一頁　金參拾圓

▼記念寫眞揭載料は一頁金拾五圓申受ます
▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なる可く振替に御送金の事
▼郵券代用は一割增但三錢切手の事

昭和十五年六月八日印刷納本
昭和十五年六月十日發行

東京市小石川區音羽二丁目一四
編輯兼發行人　富取壽鹿

東京市牛込區早稻田町五八
印刷人　栗原榮松

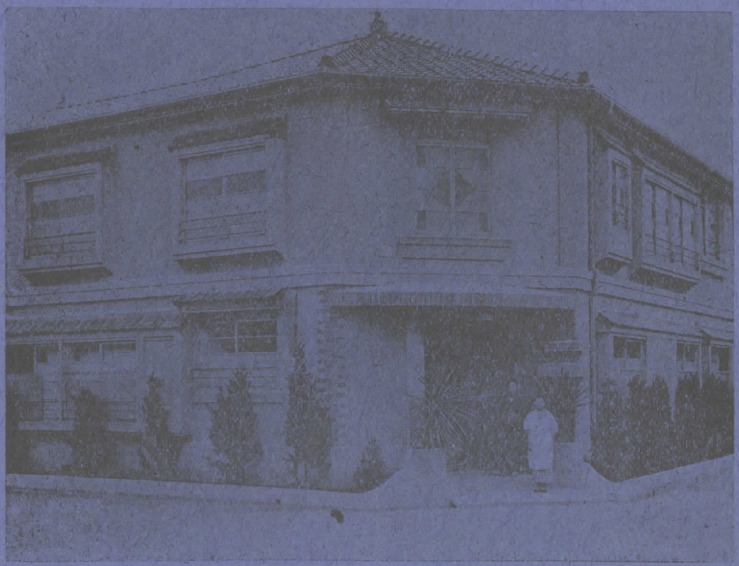
東京市牛込區早稻田町五八
印刷所　栗原印刷所
電話牛込二四五一番

東京市小石川區音羽二丁目一四
發行所　太棹社
振替東京三二七八五番

昭和十五年六月八日印刷納本
昭和十五年六月十日發行
（毎月一回十日發行）
太棹（第百十五號）
定價 金參拾錢

高級アパート

綠莊



王子區岩淵町二ノ二五〇

赤羽驛東口下車郵便局裏